Yesterday

愛するマシュー
いま、私はベッドにいます
本当なら、あなたが
私に寄りそっているのに
淋しさが身にしみます
あなたへの想いが
片時も頭を離れません
この手紙に私のキスを
私を抱いて眠ってください

愛するガブリエル
僕の毎日は果てしない暗闇だ
その中で君の手紙だけが
一筋の光を与えてくれる
夜、僕は君の手紙をとり出して
愛の香りをむさぼる
それが僕を支える酸素だ
君が身近にいるように思える
君の愛がいつまでも変らぬように

＊涙と感動の中で本当のラブ・ストーリーを私たちは見ました。

いま、この複雑な社会を背景に、それぞれの「現在」を生きている沢山のおとなたち。
その人間たちに共通してあるのは、その数とおなじだけの「過去」だ。
「過去」への懐かしさや愛おしさといった感情を心の底に溜めながら、表面は「そんな昔のことなど、もうとっくに忘れたよ」としらんかおのポーズをとって、淋しいおとなたちの「現在」が存る。
ところがごく稀れに、みずからの「イエスタディ」を「トゥディ」につなげて生きることのできる、強い愛と信念、をもったひとたちがいるのだ。
そう、まさにこの映画のふたり、ギャビーとマシューのカップルのように……。

そう、まさにこの映画のふたり、ギャビーとマシューのカップルのように……。
作家　万里村ゆき子

〝愛はひとり〟ということばが好きだ。人間はいくら愛し合ってもひとりとひとり。だから淋しいのだし、だから他者を求め、愛し合える。
「イエスタディ」の主人公ガブリエルは、それがわかっている女性だ。そして、そういう女こそ自立した女である。だから彼女は戦地へ旅立とうとする恋人に妊娠を告げなかったのだ。ベトナムへ行く人に甘い思出は、ただの心残り。それなら言わないことが愛だったのだ。そして彼女は彼の死の知らせを受けたあとも一人で愛する人の子を生み、育てることを決意する。
70年代の後半は、女性映画と自立する女が もてはやされた。けれどそれは〝自立した女＝翔んでる女＝恋なんかアクセサリー、不特定多数の恋人を持つ女……〟のイメージだった。そう、それは、ひやかしまじりの気分で男たちが作り上げた虚像だったから。でも本当は女だって昔から〝ひとり〟だったし、自立していたとえば60年代の、このガブリエルのように。〝愛はひとり〟であることを知っていて、立派に一人で愛を貫く力強い女も沢山いたはずだ。
女が自立することはファッションではなくて〝生活〟なのだ。素晴らしい誰かに出会って恋をして、それでも人間は最終的に自分を頼って生きていかなくてはいけないことを知っている女。そんなガブリエルのような女こそ真に魅力的なのだ。〝地についた〟自立する女を描く映画が出てきたことに私は拍手をおくりたい。

素晴らしい誰かに出会って、恋をして　それでも人間は……。
フリー・ライター　川野珠音

涙がとまりませんでした……。
女優　田中好子

涙がとまりませんでした。ラストでニュートンファミリーの『スマイル・アゲイン』の曲がしばらく流れていたので感動の涙にうずもれていました。
カナダとアメリカという隣同志の国なのに考え方の違いや家族という存在、そして戦争という大きな障害の前で、二人の愛がゆれ動くもどかしさ。愛すること、耐えること、信じることの大切さを新ためて知らされた素敵なラブ・ストーリーでした。

イエスタディは、ひっそりと野に咲いている可愛らしい花のような作品。
テレビ朝日「こちらデスク」キャスター　筑紫哲也

「イエスタディ」は、ひっそり野に咲いている可愛らしい花のような小品である。
ベトナム戦争、フランス系カナダ人への差別という社会問題が物語の背景になっており、それが物語に現実的タッチを与えていることはたしかだが、大上段にそれを文題に据えているわけではない。基本はラブ・ストーリーである。
無邪気に青春を楽しんでいるカナダ留学中のアメリカ人学生の主人公が、青春の発路としてのいたずらが過ぎて退学処分になる。普段ならこれだけのことだがベトナム戦争中のことだから、それは徴兵免除の解消を意味する。がくぜんとなった青年は、それでも兵隊に行く。なんとか兵役をすませば、恋人のところに戻れると思い、ベトナムに送られても、この意味のわからない戦争で本気で戦う気はなかったろう。だが、目の前で戦友が倒れるのを見て、思わず敵の銃火の前にとび出してしまう。
天真爛漫なだけに、計算や予見力がなく、楽天的に何とかなるだろうと思って生きているうちに、ずるずると破局に引き込まれていく。そういう大きな運命の手でもてあそばれるのが青春なのだ、といいたげな映画である。
「映画が描くのは結局は青春なのだ。映画は青春映画なのだ」と私に言ったのは、意外にも、剛直な社会派映画を作り続けてきたように見えた大島渚氏だった。それは必ずしも若い男女の物語が、映画の主テーマ、主人公だということを意味しない。「ラマンチャの男」ドン・キホーテは老人になっても青春を生きており、回りがオトナになっていくなかで、自分の夢を求めて苦闘する「大理石の男」も死ぬまで若い。
だが、情緒乾燥気味の、シニカルな、いまの世で、映画が青春を描くことはむずかしくなったようである。まして、その原点ともいうべき男と女の愛を描くことは。
そこで、ここ数年というもの、ずいぶんとケバケバしい、人工的な華が咲き誇り、幅を利かせてきた。
正直のところ、だから「イエスタディ」のような、素直でオーソドックスなラブ・ストーリーに出会うとホッとする。
男対男、女対女、あるいはオカルト、ホラーといろんな展開を見せてきたここ何年かの映画の流れのなかで、近ごろ「ラブ・ストーリー再興」の兆しが各国で見えてきたという。あのフランシス・コッポラが製作、監督を始めたのも、二本ともそのカテゴリーに入る作品だという。
いろんな映画があってよい。が、映画から「青春」が消えたら魅力はない、と中年になった今でも私は思う。

違いや家族という存在、そして戦争という大きな障害の前で、二人の愛がゆれ動くもどかしさ。愛すること、耐えること、信じることの大切さを新ためて知らされた素敵なラブ・ストーリーでした。

イエスタディは、ひっそりと野に咲いている可愛らしい花のような作品。
テレビ朝日「こちらデスク」キャスター　筑紫哲也

愛のために　ということはた易い——
映画評論家　渡辺祥子

愛して、愛されて、赤ちゃんを妊った『イエスタディ』のヒロイン、ガブリエルは、そのよろこびを恋人に告げる間もなく、彼を戦場に連れ去られてしまった。
カナダの娘にアメリカの野心が暗い影を投げかけ、若いカップルが結婚して赤ちゃんを育てるという平凡でささやかな幸せさえ奪ってしまったのである。
そして届けられた死の知らせ……。
ガブリエルは、赤ちゃんを生み、育てようと決意した。他に道はあったかもしれないけれど、彼女は、最も勇気を必要とする道を選んだのだ。
愛のために——と言うことはた易い。でも、逝ってしまった恋人の面影を宿した子供を育てるのは、なんと辛く苦しいことだろう。
この苦悩に耐えることによって報いられたのはむごい現実だが、彼女の勇気があれば、それを乗り越えて幸せが摑めるにちがいないと思えるのがせめてもの救いである。

愛の深さ、愛の尊さを感じとれるすばらしい作品です。
乗安　妙さん　18才〈学生〉

自然に涙がでてきてしまうラスト・シーン。人を愛することが、こんなにも素晴らしいということを教えてくれた映画です。
本橋文子さん　21才〈OL〉

まるで、雪景色の中にとけ込んでしまうような愛。全篇に流れるニュートン・ファミリーの曲。ラスト・シーンの幕切れ。とてもうれしかったです。
木村美佐子さん　28才〈OL〉

カナダでの映画製作

すでに公開されたものでは角川映画「復活の日」や「スーパーマン」、これからのものでは81年度の超大作西部劇、製作費四千万ドル（88億円）のマイケル・チミノ監督「天国の門」はカナダがロケ地。
最近は大スター出演の映画がよくカナダで製作される。リチャード・バートンとテイタム・オニールの「二人の輪」（未公開）、ジョージ・C・スコットの「チェンジリング」、そしてジョン・ヒューストン監督の「フォービア」（未公開）、また「スーパーマン2」（未公開）も続いてカナダにロケしている。
なぜいまカナダなのか。それは一つにはカナダには広大な自然の美が残されていることもあるが、イメージ・アップのためカナダ政府が積極的に外国からのロケ隊を歓迎しているからだ。もちろんカナダ国内の映画人との合作には最も力を入れていて、特別の融資、免税措置も用意している。「今までハリウッドの裏庭のように思われていたが、とんでもない、これからは表玄関になりそう」という観測も立つぐらい。
「イエスタディ」はそうしたカナダ・アメリカ関係の中でも、カナダでしか想定できない愛のドラマとして製作された。マシューとガブリエルの間の子は、カナダ人であると同時にアメリカ人であり、映画は80年代の新しい「ロミオとジュリエット」「ある愛の詩」ということもできると評価されている。

イエスタディ　イエスタディ　イエスタディ

FUJI　FUJI　FUJI